芳々
写兄指遣
雨
下

百鬼夜行拾遺下之巻目録

羅城門鬼（らせうもんのおに）

都良香（とよしか）

らせうもんをすぐく一句を吟じて曰

氣霽風梳新柳髪（きはれてかぜしんりうのかみをけづる）とその時

鬼神一句をつぎていはく

氷消波洗旧苔鬚（こほりきえてなみきうたいのひげをあらふ）と 後渡邉綱がために

腕をきられ叫くきめぐるもこの鬼神ならん

夜啼石
遠州佐夜の中山にあり
むかし孕婦この所にて
盗賊のために害せらる其
子は胎胞の内に恙なく
幸に生長しけるが その
讎を報しけるとや

芭蕉精

もろこしにて芭蕉の精人と化して物語せしことあり 今の謡物はこれによりて作れりとぞ

硯の魂
ある人赤間が関の石硯
をもとめて文房の一友
とせしに平家物語を
よみさしてとろ〳〵と
眠りけるうち
安徳の硯の海の波さかうちて
源平のたゝかひ今見るがごとく
あはれしとやかなし
徐玄之が紫石潭も
思ひあはせられ侍り

屏風闚
翠帳紅閨に枕をならべ
顛鸞倒鳳の交あさからず
枝をつらね翼をならべんと
ちぎりしも徒となりし
胸三寸の恨より
七尺の屏風も猶のぞくべし

毛羽毛現

毛羽毛現ハ惣身に毛生ひたる事毛女のごとくなれバかくいふか或ハ希有希見とかきてあることまれにみることまれなれバなりとぞ

目目連

煙霞跡なくしてむかしたれか栖し家のすみずみに目を多くもちしは碁打のすみし跡ならん歟

狂骨
狂骨ハ井中の白骨なり
世の諺ニ甚しきことを
きやうこつといふも
このうらみのはなはだしき
より
いふならん

目競
大政入道清盛ある夜の夢に
されかうべ東西より出てはじめは
二ツありしがのちには十二十五十
百千万のちにはいくらといふ数をしらず
入道もまけずこれをにらみかへして
人の目くらべをするやうなりしよし平家物語にみえたり

後神
うしろ神ハ臆病神につきたる神なり
前にあるかとすれば忽焉として
後にありて人のうしろがみを
ひくといへり

否哉

むかし漢の東方朔
あやしき虫をみて
怪哉と名づけし
ためしあり
今この否哉も
これにならひて
名付しなるべし

方相氏

論語曰郷人儺朝服而立於阼階

註儺所以逐疫周礼方相氏掌之

瀧霊王
諸国の瀧つぼよりあらはるゝと云
青龍疏又一切の鬼魅諸障を伏すと云々

白澤

黄帝東巡
白澤一見
避怪除害
靡所不徧

摸捫窩賛

鳥山石燕豊房畫

拔合門人　子興　燕二

安永十辛丑春

彫工　井上新七

文化二乙丑年求板

江戸書林

本銀町三町目　前川六左衞門

前川弥兵衞